

# 仮名研究文献一覧 (二〇一七年三月)

専修大学 斎藤研究室

## 1、異体仮名に関するもの

### ■ 字母の変遷 ■

前田 富祺 「仮名文における文字使用について―変体仮名と漢字使用の実態―」『東北大学教養部紀要』一四、東北大学教養部、一九七一年三月

前田 富祺 「字史をめぐって」『国語文字史の研究』二、和泉書院、一九九四年一〇月

築島 裕 「平安時代における仮名字母の変遷について」『訓点語と訓点資料』六一、訓点語学会、一九七九年二月

築島 裕 『日本語の世界 五 仮名』、中央公論社、一九八一年四月

### ■ 異体仮名一般 ■

宇都宮睦男 「仮名文の表記法」『愛知教育大学大学院国語研究』六、愛知教育大学大学院国語教育専攻 国語科教育・国語学・国文学専修、一九九八年三月

宇野 義方 「異体がなの使い分け」『村松明教授古希記念国語研究論集』、明治書院、一九八六年一〇月

奥村 悦三 「文字の連なり、ことばの繋がり」『国語文字史の研究』九、和泉書院、二〇〇六年四月

小柳 智一 「てには」と「てにはの字」『国語文字史の研究』一三、和泉書院、二〇一二年一二月

斎藤 達哉 「日本語と文字―日本語はどのように記されてきたのか―」、専修大学図書館編『日本語の風景―文字はどのように

書かれてきたのか―』専修大学出版局、二〇一五年四月

■字体

乾 善彦 「同形異字小考」『国語文字史の研究』一、和泉書院、一九九二年九月

遠藤 邦基 「ちぢみ「え」」『国語文字史の研究』一〇、和泉書院、二〇〇七年十二月

岡田 一祐 「江戸期のいろは仮名」『国語国文研究』一四二、北海道大学国語国文学会、二〇一三年二月

岡田 一祐 「明治期のいろは仮名」『国語文字史の研究』一四、和泉書院、二〇一四年七月

岡田 一祐 「明治検定期読本における平仮名字体」『日本語の研究』一〇―四、日本語学会、二〇一四年一月

岡田 一祐 「小学校令施行規則第一号表おぼえがき」『国語国文研究』一四六、北海道大学国語国文学会、二〇一五年六月

斎藤 達哉 「平仮名字体の新旧―改正小学校令施行規則と一八九四年の「いろはかな」―」『国語研究』七七、國學院大學国語研

究会、二〇一四年二月

柴田 雅生 「表記体と文字字形についての一試論」『国語文字史の研究』二、和泉書院、一九九四年一〇月

浜田 啓介 「板行の仮名字体―その収斂的傾向について」『国語学』一一八、国語学会、一九七九年九月

■変体仮名と文字コード

高田 智和・矢田 勉・斎藤 達哉 「変体仮名のこれまで―情報交換のための標準化―」『情報管理』、五八―六、科

学技術振興機構、二〇一五年 九月

銭谷 真人 「仮名字体研究における「学術情報交換用変体仮名」の検証と応用」『国立国語研究所論集』一一二、国立国語研究所、

二〇一七年一月

■藤原定家

家人 博徳 「定家自筆『近代秀歌』にみる「定家自筆」への一視点」『國學院雜誌』一〇八―二、國學院大学、二〇〇七年二月

- 家人 博徳「定家様を用いた書記者の書記規範意識」『都留文科大学研究紀要』七六、都留文科大学、二〇一二年一〇月
- 伊坂 淳一「藤原俊成の用字法・試論―自筆本『廣田社歌合』における機能的用字法(一)―」『学苑』五七七、昭和女子大学近代文化研究所、一九八八年一月
- 伊坂 淳一「藤原俊成の用字法・試論―自筆本『廣田社歌合』における機能的用字法(二)―」『学苑』五七八、昭和女子大学近代文化研究所、一九八八年二月
- 伊坂 淳一「藤原俊成の用字法・試論(二)―昭和切本『古今和歌集』における用字法」『千葉大学教育学部研究紀要』三八―一、千葉大学教育学部、一九九〇年二月
- 伊坂 淳一「藤原俊成の用字法・試論(三)―頭広切本『古今和歌集』における用字法」『千葉大学教育学部研究紀要』三九―一、千葉大学教育学部、一九九一年二月
- 伊坂 淳一「藤原俊成の用字法・試論(四)―日野切本『千載和歌集』における用字法」『千葉大学教育学部研究紀要』四〇―一、千葉大学教育学部、一九九二年二月
- 今村 宏「定家自筆本の表記法研究―送り仮名と同音異体字(変体仮名)用法」『国語国文学研究論文集』五、北海道学芸大学札幌分校国語国文学教室、一九六〇年三月
- 植 喜代子「藤原定家の変体仮名の用法について」『国文学攷』八二、広島大学国語国文学会、一九七九年六月
- 小笠原 一「『紅葉』と『もみぢ葉』」定家自筆本の用字法を採る(一)『学芸国語国文学』一三三、東京学芸大学国語国文学会、一九九一年三月
- 加藤 良徳「定家仮名遣再考」『名古屋大学国語国文学』八二、名古屋大学国語国文学会、一九九八年七月
- 小松 英雄「藤原定家の文字づかい―「を」「お」の中和を中心として」『言語生活』一二七二、筑摩書房、一九七四年五月
- 小松 英雄『日本語書記史原論 補訂版 新装版』笠間書院、二〇〇六年五月
- 総説 日本語書記史と日本語研究史 鏡像補正の方法／第一章 仮名文の発達 三つの書記様式の一つとして／第二章 仮名文テキストの文字遣／第三章 藤原定家の文字遣／第四章 定家仮名遣の軌跡／第五章

きしかた考 仮名文テキストの文献学的処理の方法／第六章 日本語書記史からみた法隆寺金堂薬師仏光背銘／第七章 書記テキストの包括的解析 『讃岐国司解端書』を例にして／第八章 句字考／付 章 証拠と論と

田中 雅和 「定家の表現における表記と語形の選択」『国語文字史の研究』一〇、和泉書院、二〇〇七年二月

■作品別■

(和歌・連歌)

家人 博徳 「伝西行筆『山家心中集』の表記」『古典研究会編 汲古』五九、汲古書院、二〇一一年六月

家人 博徳 「個人における表記の規則性―冷泉為秀の表記分析」『國學院雑誌』一一四―一一、國學院大学、二〇一三年十一月

遠藤 邦基 「西本願寺本三十六人集の仮名表記の異例」『国語文字史の研究』九、和泉書院、二〇〇六年四月

岡田 薫 「連歌における(つ)の仮名表記」『立教大学日本学研究所年報』九、立教大学日本学研究所、二〇一二年三月

長谷川千秋 「陽明文庫蔵二十卷本『類聚歌合』の仮名遣」『山梨大学教育人間科学部紀要』九、山梨大学教育人間科学部、二〇〇八年三月

(成尋阿闍梨母集)

伊井 春樹 『成尋阿闍梨母集』の字母』『国語文字史の研究』三、和泉書院、一九九六年六月

(源氏物語)

宇田川優子 「絵巻物詞書及び物語の変体仮名について―源氏・寝覚・葉月」『国語国文論集』一八、学習院女子短期大学国語国文学会、一九八九年三月

斎藤 達哉 「仮名写本における「改行」と「文字使用」―正徹奥書本源氏物語の事例から、『専修大学人文科学研究月報』二

- 五三、二〇一一年九月、専修大学人文科学研究所
- 齋藤 達哉「文字使用から見た専修大学本源氏物語「桐壺」(附翻字)」、『専修国文』八九、専修大学日本語日本文学文化学会、二〇一一年九月
- 齋藤 達哉「米国議会図書館蔵源氏物語写本における〈ハ〉の仮名」―異体仮名【八】【者】【盤】【は】の試験的調査、『日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究 一』、『国文学研究資料館』二〇一二年三月
- 齋藤 達哉「文字の使用状況から見た源氏物語花散里写本」、『國學院雜誌』一一三―五、國學院大学、二〇一二年五月
- 齋藤 達哉「仮名文の文字調査―源氏物語花散里六八本の仮名字母と漢字」、『専修国文』九一、専修大学日本語日本文学文化学会、二〇一二年九月
- 高田 智和・齋藤 達哉「米国議会図書館蔵『源氏物語』について―書誌と表記の特徴」、『国立国語研究所論集』六、国立国語研究所、二〇一三年一月
- 齋藤 達哉「語の表記における仮名字体の「偏り」と「揺れ」―米国議会図書館蔵源氏物語写本の「ケハヒ」と「カタハライタシ」の表記―」、『王朝文学を彩る軌跡』、武蔵野書院、二〇一四年 五月
- 齋藤 達哉「文字表記による伝本分類の試み」、『日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究 二』、『国文学研究資料館』二〇一五年 三月
- 加藤 洋介「河内本本文の成立―『舊尾州家蔵河内本源氏物語存疑』続貂」、『講座 平安文学論究 第十輯』(平安文学研究会編)、風間書房、一九九四年 一二月
- 沼尻 利通『絵入源氏』三種類の本文表記―「桐壺」の巻から』、『福岡教育大学 国語科研究論集』五四、福岡教育大学、二〇一三年三月
- 沼尻 利通『絵入源氏』三種類の字母―「桐壺」の巻から』、『福岡教育大学紀要』六二(第一分冊)、福岡教育大学、二〇一三年三月

(延慶本平家物語)

- 小川 栄一 「延慶本平家物語における文字表記の機能」『国語学』一九二、国語学会、一九九八年三月  
小川 栄一 「延慶本平家物語における表記システムの融合」『国語文字史の研究』七、和泉書院、二〇〇三年一月

(仮名書き法華経)

↓ 別項にまとめて記載

(三河物語)

- 宇都宮睦男 「自筆本『三河物語』の用語と表記(上)——六代信忠の段を中心として」『愛知教育大学大学院国語研究』三、愛知教育大学大学院国語教育専攻 国語科教育・国語学・国文学専修、一九九五年三月

(能本・狂言台本)

- 坂口 至 「虎明の表記意識」『文献探究』一一、文献研究会、一九八三年三月  
菅原 範夫 「大蔵流狂言資料に見られる平仮名用字法の諸相」『高知大学学術研究報告 人文学科』二八、高知大学、一九八〇年三月  
長谷川千秋 「世阿弥自筆能本におけるマ・バ行音の表記」『国語文字史の研究』九、和泉書院、二〇〇六年四月

(古活字本)

- 中寫 容子 「天理図書館蔵『大和物語』四種の平仮名連彫活字」『国語文字史の研究』八、和泉書院、二〇〇五年三月

(悦目抄)

齋藤 達哉 「悦目抄とその前後―字形の誤認識と用字意識の誤類推修正」 『専修人文論集』九六、専修大学学会、二〇一五年三月

(近世資料)

内田 宗一 「黄表紙・洒落本の仮名字体」 『国語文字史の研究』四、和泉書院、一九九八年八月

内田 宗一 「修紫田舎源氏」の仮名字体―作者自筆稿本と板本の比較考察」 『待兼山論叢 文学篇』三二六、大阪大学文学部、一九九八年一二月

一九九八年一二月

内田 宗一 「馬琴作合巻『金比羅船利生纜』の仮名字体」 『国語文字史の研究』五、和泉書院、二〇〇〇年五月

内田 宗一 「古事記伝」の仮名字体」 『国語文字史の研究』六、和泉書院、二〇〇一年一月

内田 宗一 「古言梯」の仮名字体」 『国語文字史の研究』九、和泉書院、二〇〇六年四月

柏原 卓 「石橋生庵日記の異体字」 『国語文字史の研究』一、和泉書院、一九九二年九月

木越 治 「近世文学作品における字母の用法について―「ますらを物語」・『おくのほそ道』・『教訓私儘育』の場合」 『国語文字史の研究』一、和泉書院、一九九二年九月

史の研究 一、和泉書院、一九九二年九月

窪田恵理子 「与謝蕪村の仮名字体の用法―俳書と書簡を比較して」 『国語文字史の研究』五、和泉書院、二〇〇〇年五月

玉村 禎郎 「春色梅兒誉美」における仮名の用字法」 『国語文字史の研究』二、和泉書院、一九九四年一〇月

永井 悦子 「近世女子用往来における仮名字体」 『国語文字史の研究』九、和泉書院、二〇〇六年四月

前田 桂子 『鹿の子餅』の仮名もじ遣い(一)―字体と出現位置を中心に」 『宇部国文研究』二九、宇部短期大学国語国文学会、一九九八年三月

一九九八年三月

三原 裕子 「江戸後期咄本における仮名の用法をめぐって」 『国文学研究』一二六、早稲田大学国文学会、一九九八年一〇月

矢野 準 「黄表紙に於ける表記法」 『国語文字史の研究』一、和泉書院、一九九二年九月

(近代資料)

- 前田 富祺 『たけくらべ』における平仮名の書体と字体 『国語文字史の研究』二、和泉書院、一九九四年一〇月
- 佐藤 栄作 『坊っちゃん』原稿に現れた漱石の手書きルールについての覚え書き 『国語文字史の研究』八、和泉書院、二〇〇五年三月
- 佐藤 栄作 『道草』の書き潰し原稿と最終原稿の文字・表記 『国語文字史の研究』一〇、和泉書院、二〇〇七年一二月
- 銭谷 真人 『明治期翻刻本における仮名字体および仮名文字遣い―馬琴作合巻の版本と活字本の比較―』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五四、早稲田大学大学院文学研究科、二〇〇九年二月
- 銭谷 真人 『明治中期の小説における仮名字体および仮名文字遣い―活版印刷における字体の統一について―』『早稲田日本語研究』一九、早稲田大学日本語学会、二〇一〇年三月
- 銭谷 真人 『仮名読新聞』における仮名字体および仮名文字遣い 『日本語学 研究と資料』三三、日本語学研究と資料の会、二〇一〇年四月
- 銭谷 真人 『言海』における仮名字体および仮名文字遣い 『日本語学 研究と資料』三五、日本語学研究と資料の会、二〇一二年四月
- 銭谷 真人 『横浜毎日新聞』における仮名字体および仮名文字遣い―明治期の新聞における字体の統一について― 『日本語の研究』一〇―四、日本語学会、二〇一四年一月
- 銭谷 真人 『明治期国語辞書における仮名字体および仮名文字遣い』『国文学研究』一七三、早稲田大学国文学会、二〇一四年六月
- 銭谷 真人 『近代作家の自筆原稿における仮名字体―手書きに残った異体仮名について―』『早稲田日本語研究』二四、早稲田大学日本語学会、二〇一五年三月
- 銭谷 真人 『活字化された変体仮名に見られる装飾的字体について』『日本言語文化』三三、韓国日本言語文化学会、二〇一五年一〇月



■漢字表記・漢字含有率■

(通史)

前田 富祺「仮名文における文字使用について―変体仮名と漢字使用の実態」『東北大学教養部紀要』一四、東北大学教養部、一九七一年三月

(藤原定家)

堀川宗一郎「藤原定家筆『更級日記』における漢字表記の様相」『國學院大學大学院 文学研究科論集』三九、國學院大學大学院、二〇一二年三月

(源氏物語)

齋藤 達哉「仮名写本における「改行」と「文字使用」―正徹奥書本源氏物語の事例から」、『専修大学人文科学研究月報』二五三、専修大学人文科学研究所、二〇一一年九月

齋藤 達哉「文字の使用状況から見た源氏物語花散里写本」、『國學院雑誌』一二三―五、國學院大学、二〇一二年五月  
田村 隆「涙」の表記情報『国語国文』八一―一、京都大学、二〇一二年二月

■著者別■

(今野 真二氏)

今野 真二「連歌書のかなづかい」『国語学』一三九、国語学会、一九八四年二月  
今野 真二「大山祇神社連歌のかなづかい」『国文学研究』八六、早稲田大学国文学会、一九八五年六月  
今野 真二「閑居友」のかなづかい―和語について『国文学研究』一〇〇、早稲田大学国文学会、一九九〇年三月

- 今野 真一 『『たまきはる』のかなづかい―和語について』『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』、一九九二年一月
- 今野 真一 「かなづかいのゆれ―荒木田守武筆本を資料として」『松蔭女子短期大学紀要』九、松蔭女子短期大学、一九九三年一月
- 今野 真一 「中世の仮名文字小考―「は」「わ」の場合」『国語国文』六三―一、京都大学、一九九四年二月
- 今野 真一 「荒木田守武のかなづかい―自筆本を資料として」『国文学研究』一一二、早稲田大学国文学会、一九九四年三月
- 今野 真一 「俳諧」連歌のかなづかい―かなづかいにおける「正風」と「俳諧」と『早稲田日本語研究』二、早稲田大学国語学会、一九九四年三月
- 今野 真一 「中世の仮名文字遣攷」『松蔭女子短期大学紀要』一〇、松蔭女子短期大学、一九九四年二月
- 今野 真一 「仮名文字遣からみた『落葉集』―「は」「わ」の場合」『国文学研究』一一五、早稲田大学国文学会、一九九五年三月
- 今野 真一 「かしこくなる仮名―『源氏物語』古写本の〈遍〉について」『國學院雑誌』九六―四、國學院大学、一九九五年四月
- 今野 真一 「仮名遣書のゆれ―慶長版『假名文字遣』について」『国語国文』六四―八、京都大学、一九九五年八月
- 今野 真一 「書記における「行」意識」『國學院雑誌』九六―一二、國學院大学、一九九五年十二月
- 今野 真一 「仮名文字遣からみた日本大学図書館蔵本『土佐日記』」『高知大國文』二六、高知大学国語国文学会、一九九五年一月
- 今野 真一 「臨摸本における本文転化―書陵部蔵『遺塵和歌集』の場合」『高知大学学術研究報告』四四、高知大学、一九九五年一月
- 今野 真一 「かなづかいの転換期―近衛家陽明家本『土佐日記』を中心資料として」『国語国文』六五―三、京都大学、一九九六年三月
- 今野 真一 「當世之假名使」『文学・語学』一五一、全国大学国語国文学会、一九九六年六月

- 今野 真二「平仮名による振仮名―太田武夫氏蔵『連証集』を資料として」『国文学研究』一一九、早稲田大学国文学会、一九九六年六月
- 今野 真二『落葉集』の仮名文字遣について―「か」「た」「に」「へ」「み」に関して『国語文字史の研究』三、和泉書院、一九九六年六月
- 今野 真二「分節機能からみた重点―『土佐日記』根幹諸本を中心資料として」『人文科学研究』四、高知大学人文学部人文学科、一九九六年
- 今野 真二「もう一つの変字法」『國學院雑誌』九七―八、國學院大学、一九九六年八月
- 今野 真二「冷泉家本と書陵部本と―『六条院宣旨集』と『躬恒集』との場合」『高知大学学術研究報告』四五、高知大学、一九九六年二月
- 今野 真二『新撰仮名文字遣』の新しさ―慶長版本『假名文字遣』を対置させて『国語学』一八七、国語学会、一九九六年一月
- 今野 真二「慶應義塾図書館『横笛物語』の表記をめぐって―かなづかいの枠組みを考える」『早稲田日本語研究』五、早稲田大学国語学会、一九九七年三月
- 今野 真二「仮名表記の諸相」『日本語学』一七一―二、明治書院、一九九八年一〇月
- 今野 真二「仮名文字遣の消長」『日本近代語研究』三、近代語研究会、ひつじ書房、一九九五年二月
- 今野 真二「表記の層―『かたこと』の表記をめぐって」『清泉女子大学紀要』四七、清泉女子大学、一九九九年二月
- 今野 真二「伏流する仮名文字遣」『清泉女子大学紀要』五九、清泉女子大学、二〇一一年二月
- 今野 真二「日本語の表記における「漢字の書き分け」使い分け」『國文學』五一―四、學燈社、二〇〇六年四月
- 今野 真二「擬定家本」をめぐって『清泉女子大学紀要』五四、清泉女子大学、二〇〇六年二月
- 今野 真二『仮名文字遣』の漢字列をめぐって『清泉女子大学紀要』四九、清泉女子大学、二〇〇二年二月
- 今野 真二「定家以前―藤末鎌初の仮名文献の表記について」『國語學』五二―一、日本語学会、二〇〇二年三月

- 今野 真一 『仮名表記論攷』 清文堂出版、二〇〇一年一月
- 今野 真一 『定家以前―藤末鎌初の仮名文献の表記について』 『国語学』 五二―一 (二〇〇四)、日本語学会、二〇〇一年三月
- 今野 真一 『書き手の意識』 『国語文字史の研究』 八、和泉書院、二〇〇五年三月
- 今野 真一 『同語異表記をめぐって』 『国語文字史の研究』 九、和泉書院、二〇〇六年四月
- 今野 真一 『文献の書写と表記と』 『国語文字史の研究』 一一、和泉書院、二〇〇九年五月
- 今野 真一 『文献日本語学』 港の人、二〇〇九年一月
- 今野 真一 『変字(かえじ)法』 と 『変字(へんじ)法』 と 『国語文字史の研究』 一二、和泉書院、二〇一一年三月
- 今野 真一 『仮名文から漢字仮名交じり文へ』 『国語文字史の研究』 一三、和泉書院、二〇一二年二月
- 今野 真一 『伏流する仮名文字遣』 『清泉女子大学紀要』 五九、清泉女子大学、二〇一一年二月

(安田 章氏)

- 安田 章 『仮名文字遣序』 『国語国文』 四〇―一、京都大学、一九七二年二月
- 安田 章 『練度』 『国語国文』 六三―四、京都大学、一九九四年四月
- 安田 章 『仮名資料序』 『論究日本文学』 二九、立命館大学日本文学会、一九六七年一月
- 安田 章 『仮名資料』 『国語国文』 四一―三、京都大学、一九七二年三月
- 安田 章 『吉利支丹仮字遣』 『国語国文』 四二―九、京都大学、一九七三年九月
- 安田 章 『仮名資料としての虎明本』 『大藏家伝之書古本能狂言』、臨川書店、一九七六年三月
- 安田 章 『仮名文字遣と国語史研究』、清文堂出版、二〇〇九年九月

内容〔第一章 仮名文字遣原論〕 仮名文字遣序／仮名資料序／仮名資料／吉利支丹仮字遣／仮名資料としての虎明本／〔第二章 近世語の断面〕 コソの中世／アドリブの意味／日本語の近世／〔第三章 外国資料による国語史研究〕 国語史研究のために 捷解新語と康遇聖／司訳院倭字書研究／ハンゲルの難波津／復権康遇聖 韓国人の遣した日本語史文献／「朝鮮司訳院日滿蒙語学書断簡解説」 以後／外国資料／〔付章〕 資料復刻・索引

(矢田 勉氏)

- 矢田 勉 「異体がな使い分けの発生」『築島裕博士古稀記念国語学論集』、汲古書院、一九九五年一〇月
- 矢田 勉 「定家の表記再考」『国語文字史の研究』九、和泉書院、二〇〇六年四月
- 矢田 勉 「平安・鎌倉時代における平仮名字体の変遷」『国語文字史の研究』四、和泉書院、一九九八年八月
- 矢田 勉 「文字史研究に於ける『片仮名』『平仮名』『草仮名』『白百合女子大学研究紀要』三六、白百合女子大学、二〇〇〇年一二月
- 矢田 勉 「表記特有文体としてのメモ体」『古典語研究の焦点』、武蔵野書院、二〇一〇年一月
- 矢田 勉 「平安後・末期における初歩的な書字教育のあり方について」『神戸大学文学部紀要』三四、神戸大学文学部、二〇〇七年三月
- 矢田 勉 「表記史資料の普遍性と特殊性」『日本語の研究』四一、日本語学会、二〇〇八年四月
- 矢田 勉 「仮名書記史研究の方法論について」『文化學年報』二四、神戸大学大学院文化学研究科、二〇〇五年二月
- 矢田 勉 「表記史的現象としての表記習慣―東大寺文書の「着到」を例として」『国文論叢』四三、神戸大学大学院国語国文学会、二〇一〇年一二月
- 矢田 勉 「誤記・誤写と書記史」『神戸大学文学部紀要』三三、神戸大学文学部、二〇〇六年三月
- 矢田 勉 「仮名文とは何か」『國文學 解釈と教材の研究』四六―一二、学燈社、二〇〇一年一〇月
- 矢田 勉 「片仮名資料に見える草体仮名の性格について」『訓点語と訓点資料』一〇六、訓点語学会、二〇〇一年三月
- 矢田 勉 「いろは歌書写の平仮名字体」『国語と国語学』七二―一二、東京大学、一九九五年一二月
- 矢田 勉 『平仮名らしき』の基準について―オの仮名を例として『国語と国文学』七六―七五、東京大学、一九九九年五月
- 矢田 勉 「異体がな使い分けの衰退―トの仮名の場合」『山口明穂教授還暦記念国語学論集』明治書院、一九九六年六月
- 矢田 勉 『夜鶴庭訓抄』の「イロハガキ」について『白百合女子大学研究紀要』三八、白百合女子大学、二〇〇二年一二

- 月
- 矢田 勉 「中・近世の文書文体に於ける漢文的要素の和化とその原理―特に「而」「与」両字用法の変遷に関して」『訓点語と訓点資料』一一四、訓点語学会、二〇〇五年三月
- 矢田 勉 「漢文文書に於ける助詞の仮名表記の変遷―「仁」の消滅と「江」の出現を中心として」『鎌倉時代語研究』二三、武蔵野書院、二〇〇〇年一〇月
- 矢田 勉 「候文における『候』字の機能」『松村明先生喜寿記念会編国語研究』明治書院、一九九三年一〇月
- 矢田 月 勉 「候文における倒置記法の簡略化とその原理」『百合女子大学研究紀要』三五、百合女子大学、一九九九年一二月
- 矢田 月 勉 「印刷時代における国語書記史の原理」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院、一九九八年二月
- 矢田 勉 「定家の表記再考」『国語文字史の研究』九、和泉書院、二〇〇六年四月
- 矢田 勉 「近世整版印刷書体における平仮名字形の変化」『神戸大学文学部紀要』三五、神戸大学文学部、二〇〇八年三月
- 矢田 勉 「振り仮名」『朝倉漢字講座一 漢字と日本語』朝倉書店、二〇〇五年三月
- 矢田 勉 「文字研究の歴史」『朝倉日本語講座一 文字・書記』朝倉書店、二〇〇五年七月
- 矢田 勉 「鈴屋の文字意識とその実践」『鈴屋学会報』一五、鈴屋学会、一九九八年一二月
- 矢田 勉 「近世における漢字研究の方法」『神戸大学文学部紀要』三七、神戸大学文学部、二〇一〇年三月
- 矢田 勉 「近世いろは歌研究史稿(上)」『国文百合』三一、百合女子大学国語国文学会、二〇〇〇年三月
- 矢田 勉 「近世いろは歌研究史稿(中)」『国文百合』三二、百合女子大学国語国文学会、二〇〇一年三月
- 矢田 勉 「近世いろは歌研究史稿(下)」『国文百合』三五、百合女子大学国語国文学会、二〇〇四年三月
- 矢田 勉 『倭片仮字反切義解』の成立年代について『神戸大学文学部研究紀要』三二、神戸大学文学部、二〇〇五年二月
- 矢田 勉 「国学者のテキスト意識の発達と上代文献の刊行」『百合女子大学研究紀要』三九、百合女子大学、二〇〇三年

一二月

矢田 勉『国語文字・表記史の研究』汲古書院、二〇一二年二月

内容 「第一編 文字・表記史研究の目的・方法・資料」第一章 文字・表記史研究の目的／第二章 文字・表記史研究の術語／第二章 書記体の分類と非陳述的書記体／第四章 書記教育史としての文字・表記史／「第二編 文字・表記史の原理」第一章 国語文字・表記史の概観／第二章 文字・表記史と表記史資料の普遍性・特殊性／第三章 仮名表記史の原理／第四章 表記史的現象としての表記習慣／第五章 文字・表記史と誤記・誤写／「第三編 平仮名史・平仮名文表記史の研究」第一章 平仮名書きの意味／第二章 平安・鎌倉時代における平仮名字体の変遷／第三章 片仮名資料に見える草体仮名の性格／第四章 平仮名書きいろは歌の成立と展開／第五章 「平仮名らしき」の基準とその変遷／第六章 定家の表記再考／第七章 異体仮名使い分けの発生／第八章 異体仮名使い分けの衰退／第九章 平仮名表記史資料としての書道伝書／「第四編 漢字文表記史の研究」第一章 漢文和化の原理1—中・近世の文書文体における漢文的要素の和化／第二章 漢文和化の原理2—助詞の仮名表記／第三章 候文の特質1—「候」字の機能／第四章 候文の特質2—倒置記法の簡略化とその原理／第五章 国語漢字書記における楷行草／「第五編 印刷と文字・表記史」第一章 印刷時代における国語書記史の原理／第二章 近世整版印刷書体における平仮名字形の変化／第三章 漢字仮名交り文の成立／第四章 漢字仮名交り文要素としての振り仮名／第六章 文字意識史と文字研究史／第一章 文字研究史再考／第二章 鈴屋の文字意識とその実践／第三章 気吹舎の文字意識とその実践／第四章 近世における漢字研究の方法／第五章 近世いろは歌研究史／第六章 「倭仮名字反切義解」の成立年代／第七章 テキスト意識の展開／初出一覧・索引(書名・資料名索引、人名索引、文字・表記史研究用語索引)・後書き

矢田 勉「十一世紀中頃における平仮名字体…実用的資料と美的資料との連関について」『語文』一〇〇・一〇一(特集等百輯記念号)、大阪大学国語国文学会、二〇一三年一二月

以上